

「異常気象レポート 2014」の公表について

気象庁では、国内外の関係機関と協力しながら、異常気象や地球温暖化などの気候変動の観測・監視を行い、そのデータを分析するとともに将来変化の予測を行っています。また、地球温暖化問題などに対する関係機関の施策への活用や、国民一人ひとりの地球環境問題に関する理解に役立てることを目的として、これらを取りまとめた「異常気象レポート 近年における世界の異常気象と気候変動―その実態と見通し―」を、昭和 49（1974）年以来 7 回にわたって刊行しています。

この度、最新の成果や知見を「異常気象レポート 2014」として取りまとめましたので、気象庁ホームページで公開します。約 260 ページの本編のほか、その主な内容を抽出した約 30 ページの概要編も合わせて作成しております。

本報告書は、気象庁による観測、監視、解析結果のほか、気候変動に関する政府間パネル（IPCC）の評価報告書や国内外の研究機関の研究成果を広く参照しながら、現在起こっていることから将来予測されていることまで、体系的に取りまとめております。

主な掲載内容は次の通りです。

- ・世界及び日本の最近の異常気象と気象災害
- ・大気・海洋・雪氷等の長期変化傾向
- ・大気・海洋・雪氷の将来の見通し

より詳細な内容については別紙をご覧ください。また、本報告書の全文は気象庁ホームページ上の「各種データ・資料」の「地球環境・気候」からご覧いただけます。

（レポートの URL: http://www.data.jma.go.jp/cpdinfo/climate_change/）

＜本件に関する問い合わせ先＞

気象庁 地球環境・海洋部 地球環境業務課
電話：03－3212－8341(内線 4225)

異常気象レポート 2014 の構成

第 1 章 異常気象と気候変動の実態

- 1.1 最近の異常気象と気象災害
 - 1.1.1 世界の最近の気象災害
 - 1.1.2 世界の最近の異常気象とその背景要因
 - 1.1.3 日本の最近の気象災害
 - 1.1.4 日本の最近の異常気象とその背景要因
 - 1.1.5 異常気象に関連する大気や海洋の自然変動
 - 1.1.6 エルニーニョ／ラニーニャ現象
- 1.2 大気・海洋・雪氷の長期変化傾向
 - 1.2.1 気温
 - 1.2.2 降水
 - 1.2.3 海面水温と深層水温
 - 1.2.4 海洋貯熱量
 - 1.2.5 海面水位
 - 1.2.6 海水域
 - 1.2.7 積雪域
 - 1.2.8 十年～数十年規模変動
- 1.3 異常気象・極端現象の長期変化傾向
 - 1.3.1 世界の異常気象・極端現象
 - 1.3.2 日本の異常気象・極端現象
 - 1.3.3 台風活動の長期変動
- 1.4 大気組成等の長期変化傾向
 - 1.4.1 大気・海洋中の二酸化炭素
 - 1.4.2 大気中のメタン
 - 1.4.3 大気中の一酸化炭素
 - 1.4.4 大気中の反応性ガス及びハロカーボン類
 - 1.4.5 太陽放射と赤外放射
 - 1.4.6 エアロゾル

第 2 章 異常気象と気候変動の将来の見通し

- 2.1 気候変動予測と将来シナリオ
 - 2.1.1 気候変動予測の手法と不確実性
 - 2.1.2 将来予測のシナリオ
- 2.2 大気の将来の見通し
 - 2.2.1 気温
 - 2.2.2 降水量
 - 2.2.3 極端な気象現象

- 2.2.4 日本付近の季節進行の変化
- 2.3 海洋・雪氷の将来の見通し
 - 2.3.1 海面水位
 - 2.3.2 海氷
 - 2.3.3 世界の将来の積雪
 - 2.3.4 日本の将来の積雪
- 2.4 最新の気候変動に関する研究の動向
 - 2.4.1 最新の気候モデルによる予測の現状
 - 2.4.2 エーロゾル放射強制力の不確実性
 - 2.4.3 雲と雲フィードバックの不確実性

このほかに、次のようなコラム（囲み記事）や付録を掲載。

コラム

- ・ 異常気象発生数の算出方法
- ・ 個々の異常気象と地球温暖化との関係
- ・ 生物季節現象の変化
- ・ 気温上昇の停滞
- ・ ヒートアイランド現象
- ・ 太陽活動と気候変動
- ・ 海水塩分
- ・ 熱塩循環
- ・ アメダスでみた短時間強雨と大雨の発生回数の変化傾向
- ・ 竜巻と突風の変化傾向
- ・ ライダーによるエーロゾル鉛直分布の観測
- ・ 詳細な地域気候の再現手法
- ・ 古気候再現実験にみる過去の地球の気候の変化
- ・ 変動幅の変化

付録

- ・ 気候変動とその要因
- ・ 国際動向
- ・ 日本国内の地球温暖化研究に関わる動向
- ・ 異常気象や極端現象、気候変動に関する基本的知識